

イザヤ書8-9章7節 「子によるしるし」

1A アッシリアによる略奪 8:1-10

1B 新しい子の名 1-4

2B シロアハの水の拒絶 5-8

3B ともにおられる神 9-10

2A 民の流れに抗う証し 8:11-22

1B 聖なる方とする決意 11-16

2B 主への望み 17-18

3B みおしえを尋ねない後の暗黒 19-22

3A 暗やみの中の光 9:1-7

1B ガリラヤの栄誉 1-5

2B 神の独り子 6-7

本文

私たちの学びは、イザヤ書 8 章に入ります。時は南ユダ王国の、アハズの統治です。アッシリア帝国が、この周辺一帯に侵略を始めつつあった時です。ユダの北にあるイスラエル王国と、その北東にあるアラム、今のシリアですが、彼らがアッシリアに対抗するために連携します。さらに、南ユダ王国にも入らせようとしています。それで、この二つの国が、ユダに攻め入ります。その時に、主が介入され、その試みは失敗に終わりました。そして再び攻め入ろうとします。その時に、アハズの心、ユダの家の心は揺らぎました。そこに現れたのが、イザヤです。

イザヤは、イスラエルの神はユダを救うという神の約束を伝えました。彼らはむしろ、滅んでしまうことも告げました。ところが、アハズは、イスラエルの神以外のものであれば、すべての神々により頼みますが、主なる神ご自身については拒みます。「主は試しません」という、彼の言葉に代表されます。そして、こともあろうに、彼はこの地域一帯を侵略してこようとしているアッシリアに、アラムと北イスラエルを倒すように、お金を送るのです。それで、確かにアッシリアはその二つの国を滅ぼしました。ところが、それだけで終わりません。アッシリアは、ユダの町々にも攻め入っていくのです。アハズは、非常に恐れ、神に求めるのではなく、他のものに求めたため、その恐れているものを、自ら招き入れることを行っています。

そうした中で、主はアハズとユダの家に、しるしを与えています。主が確かにおられることを示すしるしは、男の子です。それは、イザヤの息子二人です。一人は、「シェアル・ヤシュブ」です。「残りの者は帰って来る」という意味です。そして 8 章から、もう一人の男の子が生まれます。この子たちがしるしとなり、主が事を行われることをイザヤは預言します。けれども、その二人の息子のこと

を語っている間に、神ご自身の子、キリストの預言があります。それが、処女から生まれるインマヌエル、神が共におられる、ということです。女から生まれるその子は、神の子ご自身です。

1A アッシリアによる略奪 8:1-10

8章は、イザヤのもう一人の息子が生まれる話から始まります。

1B 新しい子の名 1-4

¹ 主は私に言われた。「一つの大きな板を取り、その上に普通の文字で、『マヘル・シャラル・ハシュ・バズのため』と書け。² そうすれば、わたしは祭司ウリヤとエベレクヤの子ゼカリヤに、わたしの確かな証人として証言させる。」³ それから私は女預言者に近づいた。彼女は身ごもって男の子を産んだ。すると、主は私に言われた。「その名をマヘル・シャラル・ハシュ・バズと名づけよ。⁴ それは、この子が『お父さん。お母さん』と呼ぶことを知る前に、ダマスコの財宝とサマリアの分捕り物が、アッシリアの王の前に持ち去られて行くからである。」

シェアル・ヤシュブに引き続き、主がイザヤに新たな子を与えられました。「女預言者に近づいた」と言っていますが、これはイザヤの妻のことです。そして、ゼカリヤに新たに男の子がエリザベツに与えられた時に、名前をヨハネとすることを書き板に書きましたが、同じようなことをさせています。そしてそれを読む相手は、祭司です。本来であれば、主に対する祭司として仕えていなければいけないところ、この祭司ウリヤはアハズの命令を受けて、なんとエルサレムの神殿のダマスコにあった神殿の祭壇を作っています(2列王 16:10 以降)。道から逸脱したのは、王だけでなく、祭司もそうでした。

そして意味は、「**早い、略奪、急いで、戦利**」というものです。アッシリアが、ダマスコとサマリアの分捕り物をすばやく持ち去ることを示す名前でした。紀元前 734 年にティグラト・ピレセルはイスラエルの海沿いを南下して、エジプトの国境まで行きます。733 年には、北イスラエルの多くに侵略して、多くを捕え移します。「2列王 15:29 イスラエルの王ベカの時代に、アッシリアの王ティグラト・ピレセルが来て、イヨン、アベル・ベテ・マアカ、ヤノアハ、ケデシュ、ハツオル、ギルアデ、ガリラヤ、ナフタリの全土を占領し、その住民をアッシリアへ捕らえ移した。」この時からガリラヤ地方はアッシリア領となります。そして 732 年にダマスコが陥落します。早く、略奪、急いで、戦利です。

2B シロアハの水の拒絶 5-8

⁵ 主はさらに、続けて私に言われた。⁶「この民は、ゆるやかに流れるシロアハの水を拒み、レツインとレマルヤの子を喜んでいる。」

シロアハの水は、ギホンのあるところにある水です。ソロモンがそこで祭司ツアドクと預言者ナタンに油注がれ王となりました(1列王 1:45)。シロアハの水は非常に少なく、小さいものですが、ダビデ

王朝にとって非常に重要なものです。それをないがしろにして、レツインとレマルヤの子を喜んでい
る、つまりダビデの神、主に頼らずに、アッシリアの王に頼って二つの国が倒れたことを喜んでい
る、ということです。

⁷ それゆえ、見よ。主は、強く水の豊かなあの大河の水、アッシリアの王とそのすべての栄光を
彼らの上にあふれさせる。それはすべての運河にあふれ、すべての堤を越え、⁸ ユダに勢いよく流
れ込み、あふれみなぎって首にまで達する。その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの地をおお
い尽くす。」

アッシリアからの水はイスラエルにとどまらず、ユダにまで押し寄せてきました。それを翼にも喩
えて、ユダ全体に広がっている様子を描いています。事実、ヒゼキヤの時代には、エルサレムを
除き、全てのユダヤの町々はアッシリアに攻略されました。

私たち信仰者と呼ばれている者が、目の前に与えられている主の源泉をないがしろにしている
姿に通じるでしょう。それは小さな流れであります。しかし、そこにこそ主ご自身の源があります。し
かし、人間的な方法、肉に頼り、物事を動かしたら、その時はうまく行くかもしれません。しかし、御
霊に拠らないので、必ずその大変な結果を招きます。シロアハの水と、ユーフラテスの川の比較
です。目の前にあるものは小さく見え、遠くにある世にあるものは大きく見えます。けれども、その
頼りにしようと思っている人間的なもの、肉は自分の助けになるのではなく、自分を襲ってきて、自
分を苦しめます。

しかし、神は憐れまれます。「その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの地をおおい尽くす。」と
あります。首にまだアッシリアという水かさが達した時に、インマヌエルの約束を実現されます。ヒ
ゼキヤの時に、主はアッシリアを倒されます。イザヤ書の真ん中、36 章から 39 章のところに、エ
ルサレムがアッシリアから救われる奇跡が記録されています。

しかし、それだけではありません。インマヌエルの約束は、ユダ王国の時代だけでなく、後に実
現して下さいます。ダビデの家は、異邦人の勢力の度重なる侵略にも関わらず、それでも残りま
した。そして、インマヌエルなるイエスがお生まれになるようにして下さいました。マタイ 1 章を見
ると、イエス・キリストの系図がダビデの時からヨセフの時まで残っています。

3B ともにおられる神 9-10

⁹ 諸国の民よ、打ち砕かれよ。遠く離れたすべての国々よ、耳を傾けよ。腰に帯をして、わななけ。
腰に帯をして、わななけ。¹⁰ はかりごとをめぐらせ。しかしそれは破られる。事を謀れ。しかしそれ
は成らない。神が私たちとともにおられるからだ。

この最後の言葉「神が私たちとともにおられるからだ。」も、ヘブル語ではインマヌエルになっています。ですから、ヒゼキヤの時代にアッシリアが襲ってきた時に主が共におられるということだけでなく、主がお生まれになる時までユダは滅ぼされないことを教えている箇所です。どんな力ある者も、この小さき子の前では太刀打ちできないということです。

ルカ 2 章にある、ローマ皇帝アウグストゥスが住民登録をさせ、ヨセフがベツレヘムに行かねばならず、いいなづけのマリアは臨月でした。けれども、家畜小屋で主がお生まれになりました。このことを天の軍勢が喜び、神を賛美しました。小さき子イエスの前で、ローマ皇帝でさえわななく、つまり自分たちのはかりごとを実現させることはできないのです。すべては神の時計で、神のご計画の通り動いており、この小さな赤ん坊がしるしとなっています。

2A 民の流れに抗う証し 8:11-22

1B 聖なる方とする決意 11-16

¹¹ まことに、主は強い御手をもって私を捕らえ、この民の道に歩まないよう、私を戒めてこう言われた。¹²「あなたがたは、この民が謀反と呼ぶことを 何一つ謀反と呼ぶな。この民が恐れるものを恐れてはならない。おびえてはならない。

ここに、イザヤへの神の戒めがあります。6 章の、イザヤの告白を思い出してください。自分は唇が汚れた者で、唇の汚れた者の間に住んでいる、と言っていました。彼はユダにある不正を糾しながら、自分自身がウジヤ王に頼っていたという、時の流れに従っていた者でした。したがって今、彼は全く時流に抗うこと、みなぎ謀反と呼ぶことを一緒に謀反というなど言っています。また、民が恐れることをいっしょに恐れてはならないと戒めておられるのです。

私たちは基本的に、他の多くの人々がこうだと思っているものを選んでいきます。そうすれば、角が立ちません。しかし、教会は、そうした人間的なこと、その常識とは正反対のことを教えることがあります。それが主の教えだからです。

¹³ 万軍の主、主を聖なる者とせよ。主こそ、あなたがたの恐れ。主こそ、あなたがたのおののき。

^{14a} そうすれば、主が聖所となる。

私たちは、主を聖なる方として、人を恐れるものではありません。聖なる方とするのは、あがめることです。この方がこうだと言われることを、大事にしていきます。セラフィムが聖なる、聖なる、聖なる、と叫んだこの方との出会いの中で、この方が教えとしておられることを選び取ります。それが、皆が考えていることと正反対でも、選び取るのです。

そうすると、「主が聖所となる。」とあります。主を畏れ敬うことで、主ご自身が共におられることを

知るので。主が臨在してくださることを知るのが、主を恐れる者に対する恵みです。他には、安まるどころがなかったとしても、主ご自身が安まる場所としてくださいます。

^{14b} しかし、イスラエルの二つの家にとっては 妨げの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には 罨となり、落とし穴となる。¹⁵ 多くの者がそれにつまずき、倒れて打ち砕かれ、罨にかかって捕らえられる。

信じない者たちにとっては、主の聖所となるべきその臨在が、つまずきの岩、また捕らわれる罨となっていく。ただ、ここで信じないという者は、本来なら信じているはずのイスラエルとユダの家です。そして、神の宮のあるエルサレムの住民です。信じていると言われている者が人間的な考えを選択し続ける時に、つまずきます。パウロは、この箇所を引用して、ユダヤ人でイエス様につまずく人々をこう話しています。「9:32-33 なぜでしょうか。信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。この方に信頼する者は失望させられることがない」と書いてあるとおりです。」教会であっても、主をあがめる時、聖なる方とする時に、信仰に拠らないで来ている人々は、つまずいていくということです。

¹⁶ この証しの書を束ねよ。このおしえを わたしの弟子たちのうちで封印せよ。」

証しと教えです。主の語られる言葉、その教えこそが私たちを守ります。この方の教えを守る弟子となる時に、主はご自身のことを現してくださいますが、他の人たちには分からなくなります。弟子とそうでない人の違いは、第一に、主の証しと教えを自分の中にしっかりと納めているかどうか？であります。たとえ、世が正反対の方向を向いていても、自分は主の教えを握りしめます。そして、主ご自身の臨在を喜びとしているかどうか？であります。主に何かをしてもらえろというような、ご利益的なものを求める関係であれば、つまずきます。そうではなく、主ご自身を喜んでいる人たちが弟子です。

2B 主への望み 17-18

¹⁷ 私は主を待ち望む。ヤコブの家から御顔を隠しておられる方を。私はこの方に望みを置く。

イザヤの告白です。どんな目に見えるしるしを認められなくても、それでも主を待ち望みますと告白しています。状況が困難になっても、私はキリストにこそ望みをかける、という告白です。そして、見えないので信じます。目に見えているものに頼らず、目に見えないところを信じて望みをかけます。そして今これらのことは、「ヤコブの家から御顔を隠しておられる」とあるように、不信仰に陥っているイスラエルには見えなくされています。

¹⁸ 見よ。私と、主が私に下さった子たちは、シオンの山に住む万軍の主からのイスラエルでのしるしとなり、また不思議となっている。

二人の子がイザヤに与えられました。間もなく主は事を行われることを、「残りの者は立ち返る」という名のシェアル・ヤシュブ、そして、「早い、略奪、急いで、戦利」という名のマヘル・シャルル・ハシュ・バズがしるしとなっています。そして「不思議」ともなっています。不思議とは、私たち人間の思いもつかないことを行われるので、不思議であり、神ご自身に属する特徴です。

3B みおしえを尋ねない後の暗黒 19-22

¹⁹ 人々があなたがたに「霊媒や、ささやき、うめく口寄せに尋ねよ」と言っても、民は自分の神に尋ねるべきではないのか。生きている者のために、死人に尋ねなければならないのか。²⁰ただ、みおしえと証しに尋ねなければならない。もし、このことばにしたがって語らないなら、その人に夜明けはない。

主の教えとは、聖霊によって私たちの霊に語られ、私たちの霊を清め、強くし、揺るがないものにしてくれます。けれども、そこには絶えず、自分が碎かれる体験、へりくだりが必要です。自分というものをしっかりと持っている時、何とかしてそれを守るために、神以外のもので不安を補おうとします。それが、霊媒や口寄せなどです。

私たちは、占いなどに頼ることはないでしょう。けれども、神の言葉ではそうではないとはっきりと教えていることを、「そうでいいんですよ」という囁きは周囲の至るところにあります。それがキリスト教の教師と呼ばれる人々からも聞こえます。私たちの気分がどんなに害されようと、どんなに傷つこうと、主の言葉こそが傷ついた魂を癒し、平安をもたらします。これから離れては夜明けがない、つまり暗き世に光を見出すことができないのです。

²¹ その人は迫害され、飢えて国を歩き回り、飢えて怒りに身を委ねる。顔を上に向け、自分の王と神を呪う。²² 彼が地を見ると、見よ、苦難と暗闇、苦悩の間、暗黒、追放された者。

主の教えに聞き従わないユダヤ人は、ここに書かれている迫害と困難、敵の怒りを受けてきました。北イスラエルはアッシリアによって滅ぼされ、ユダはバビロンに滅ぼされます。そしてペルシアに変わって帰還はしますが、周囲の住民に虐げられます。そしてギリシアの時代は、その王たちに踏み荒らされました。それから、ローマがやって来て、ローマに媚びるヘロデ王が台頭して、彼らをさらに虐げるのです。

3A 暗やみの中の光 9:1-7

このような苦しみを見る時に、私たちは気を失いそうになります。本当に希望があるのか、と思い

ます。しかし、希望を失いそうになるとき、むしろ人間的な期待がなくなってしまう時に、その時にまことの光が輝くのです。イエスは、イスラエル人にとって異邦人による苦しみの中にあるユダヤ人のところに来てくださいました。

1B ガリラヤの栄誉 1-5

¹ しかし、苦しみがあったところに闇がなくなる。先にはゼブルンの地と ナフタリの地は辱めを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦の民のガリラヤは栄誉を受ける。² 闇の中を歩んでいた民は 大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に 光が輝く。

先に、北イスラエルのペカの時代に、ガリラヤにいる者もアッシリアに捕え移されたことを読みました。ゼブルンとナフタリの割り当て地のところ、そこがガリラヤです。「海沿いの道、ヨルダンの川向こう」とありますが、海沿いの道とは、ラテン語で「ウァ・マリス(Via Maris)」と呼ばれる、エジプトから地中海沿いの道を北上し、メギドを通り、それからガリラヤ湖の町、カペナウムから北上します。そして、ダマスコ、そしてユーフラテス上流にまでつながる国際幹線道路であります。カペナウムの少し先にヨルダン川があります。まさに、そこに住む者たちに光栄が来るという預言です。私たちの愛する主イエス、この方はガリラヤで育ち、ここで宣教活動をなされることで、イザヤの預言を成就されました。



³ あなたはその国民を増やし、その喜びを増し加えられる。彼らは、刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜ぶ。

イエスが宣教されることによって、多くの者に喜びが加えられました。

⁴ あなたが、彼が負うくびきと 肩の杖、彼を追い立てる者のむちを、ミディアンの日になされたように 打ち碎かれるからだ。⁵ まことに、戦場で履いたすべての履き物、血にまみれた衣服は焼かれて、火の餌食となる。

くびきが打ち碎かれるということは、霊的には悪霊が追い出されるなど、イエス様の宣教の働きによって実現しました。けれども、この預言にあるように、物理的に、軍事的に、異邦人の支配を打ち碎くのは見ていません。当時のユダヤ人は、ローマの圧政に対して、その虐げに苦しんでいたため、メシアに対する待望が最高潮に達していました。ガリラヤ人たちは、血気盛んな反ローマ

でした。事実、ユダヤ人による反乱が紀元 66 年に起こってからは、ガリラヤではガムラという町と、あのマグダラの町でも、激しい戦闘が繰り広げたのです。

けれども、ここが預言のすべての成就を見なければいけないところです。イエス様は、復活の後、エマオの村に向かっている弟子たちに語りかけられました。彼らは、イエスがイスラエルを贖ってくださるものだと思っていたと言いました。するとイエス様は、こう言われました。「ルカ 24:25-27『ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。』それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」聖書には、栄光と力を身にまとったメシアの姿があります。確かに、異邦人の勢力を、イスラエルのために打ち砕かれます。しかし、メシアは苦しみを受ける姿も預言されているのです。むしろ、苦しみを受けて、それから栄光に入るのです。

預言は信じていたのですが、その全てを信じていなかったのです。主は、聖書全体に書いてあることを説き明かしました。そして、キリストが苦しみを受け、三日目によみがえり、罪の赦しを得させる悔い改めを説きなさいと命じられました。そして、再び来てくださるのです。

2B 神の独り子 6-7

^{6a} ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。

インマヌエルなる方、ダビデの家から、処女から生まれるのがしるしと呼ばれた方についての預言です。日本語訳には上手に出ていませんが、「人として生まれたが、神によって生まれた御子なのだ」という、人であるのに神であるということがはっきりと宣言されています。「ひとりのみどりご」はその通りです。肉体をもって赤ん坊が生まれます。そして、「ひとりの男の子が私たちに与えられる。」というのが、御子が与えられると訳すことのできる部分です。

^{6b} 主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

ひとり子は、神と同一です。「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」であります。「不思議な助言者」とありますが、私たちの及びもつかないところで神がご計画を実現されます。だれが、赤ん坊から世界を救うという計画を立てていると思うのでしょうか？そして、王室ではなく貧しい家庭から生まれ、そして、ガリラヤという片田舎で宣教をして、さらにローマへの反乱を鎮めるために極刑にする十字架刑に処せられると思っているのでしょうか？ましてや、誰が死者の中からのよみがえるなどと、考えられるのでしょうか？これがあまりにも不思議なのです。

次に、「力ある神」とあります。この子が神ご自身であることを宣言しています。十字架という弱

さに中に、人を救う神の力があります。そして、「永遠の父」とあります。この方を知ること、永遠の父を知り、永遠のいのちを持ちます。そして、「平和の君」です。私たちに平和をもたらす、君となったださっているのです。イエスご自身こそが平和であり、十字架において敵を打ち壊して下さったと信じる時、そこに思いを超えたところの平和が造られます。

⁷ その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

再臨のキリストの働きです。主はダビデの子として生まれました。けれども、十字架につけられ、よみがえられ、天に昇られて、今、父なる神の右の座に着いておられます。この方が地上に戻られます。エルサレムに戻られます。その時に、ダビデの家を回復されます。そこにある神殿に王座を設けられ、王として祭司として、世界を治められます。そして、正義のさばきを行われ、平和で世界を満たされるのです。

そして、「万軍の主の熱心」がそれを成し遂げるとあります。主は熱意を持っておられる方です。悪霊どもは、イエス様に対して「私たちを放っておいてください。(ルカ 4:34 別訳)」と言いました。これが、主イエスが生活に介入される時に叫び出す悪霊どもの叫びなのです。「生きるのはキリスト、死ぬのもまた益です。」とパウロが言ったとおり、情熱のないクリスチャン生活はあり得ません。

このようにして、私たちは「子によるしるし」の箇所を読みました。イザヤの二人の子、そしてメシアご自身の誕生です。思えば、ヨセフとマリアが幼子イエス様をエルサレムに連れてきた時に、シメオンがイスラエルの慰めをこの子に見ました。イスラエルの救いが来た、と彼は言いました。こんな小さなところに、世界を救う希望がありました。私たちにも、それは若枝のように、出てきた芽のように小さな働きかもしれません。けれども、それがいかにちよろちよろと流れる水のように見えても、しっかりと主につながっていきましょう。人間的な方法に傾かないように、主から戒めを受けてください。主を聖なる方とし、恐れ、その教えによって神のご計画が知らされる弟子となりましょう。